

Title	第45回基研研究部員会議議事録
Author(s)	
Citation	物性研究 (1969), 11(4): 325-344
Issue Date	1969-01-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/86805
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

第45回基研研究部員会議議事録

1968年11月1日

於 小講義室

議 長 山 田 英 二
丸 森 寿 夫
金 森 順次郎

出席者 研究部員 26名
運営委員 13名
所 員 10名
オブザーバー 2名

1. 基研報告

湯・川 まだ確定したことではないが、かなりの確率で、今年度中にも、
宿舎が新築できそうだ。

その運営について部員会で少し議論して欲しい。

2. 外人招聘

湯 川 ◦ C. G. M. Lattes氏が10月末に基研に来た。事後承諾になる
が、滞在費を出した。
◦ 既に決っている Weyers氏の分を除くと、あと1カ月分の予算
しか残っていない。
◦ Wongyong Lee氏が来春はじめ2～3週間基研に来たいという
話がある。

コロンビア大 Associate Professor

今、Cern にいて C-invariance の研究をしている人。

東大、釜江氏の推薦

河原林 他に候補者がなければ Lee氏に滞在費を出して欲しい。しばらく待
ってもっと出したい人があったら、その時点で考えてもよい。

小 沼 Weyersは秋に来るはずだったが、のびている。来年3月迄に来る

資 料

だろうという話だ。

山 田 他に候補者がなければ Lee 氏に出すことにし、後の処置は基研に
*
まかせたい。

* (後日所員会議で、Wongyong Lee 氏に出すことになった。)

3. 数研専門委の推薦

松田氏から数研専門委の性格等について説明があり、討論された結果

物性からは 長谷川 洋 氏 (京大理)

素粒子からは 川 口 正 昭 氏 (阪大基礎工)

を推薦することになった。

但し 1 川口氏 (外国出張中) が辞退されたら小沼氏

2 長谷川、川口のコンビの時は数研と交渉して基研のスタッフが
オブザーバーの形で参加出来るよう努力する。

(運営委員会で2の件はやめることになった。)

4. 計算費追加募集

後期の計算費の余分30万円、「相対論による二体方程式の研究」のグループが遠慮された10万円の計40万円について今年度基研の計算費使用が
決っている Group に対し追加募集を行った。

応募は 「宇宙論と銀河の進化」 7万円

責任者 佐 藤 文 隆 (京大理)

「不規則格子中の電子状態及び格子振動スペクトル」

責任者 米 沢 富美子 (基研) 20万円

の2件である。

という説明が矢島氏からなされ、討論の末、今回は、この2件の申請をそのまま認め、残りはそのまま残しておくことになった。

5. Supplement について

湯川先生から Supplement の性格について説明があった。

◦ 日本で開拓され、発展せられた研究をとりあげるのが主旨

◦ 年間の総頁数約1000頁 1号につき200～250頁

頁数の関係で合併号にすることもある。

(Extra number も年間1000頁の枠内に入る)

。Supplement の性格にあうものでも、頁数の関係で Extra — Number になっているものもある。

小林(稔) Supplement にどういうものを取りあげたらよいか。討論して欲しい。

湯 川 長期研究計画で Supplement の性格にあうものもとりあげるとよい。

牧 今年度から3月の運営委員会で Advisory Council を開き、次の年度出す Supplement について考えることになった。

湯 川 中期には、計画が出ていても、実現しないことが割に多かった。最近その傾向は減ってきたが、

末 包 Supplement の性格は

- 1 基研の project の成果をまとめるというのが最近の傾向
- 2 Progress に出したものの頁数が長く、Supplement にまわされたもの。

3 個人で Supplement に出してもらう（最近少ない）
の3つが主なものだと思うが、これに性格を規定するのか
Clebsh — Gordon の表のようなものを出す可能性は？

湯 川 表のようなものは場合によってはとりあげる。

referee にかけるべきで、ここで編集責任者の意見が入る。

沢 田 Supplement の性格は細く規定しない方がよい。外国人の仕事でとりあげるべきものもある。国際的視野で考えるべき。

湯 川 国粹主義はよくない。Weisskopf が来た時の話を出したり外国人のものを出してもよい。日本人として主張するものがないというのもよくないが …………… 。

丸 森 日本では真の意味での国際交流が少ない。

基研でやった活動が正しく伝わっていない。単に論文として出版された成果をまとめるだけでなく、成果を生む過程としての研究会で Reporter がどういうことを言い、それに基づいてどういう討論がされたかというような研究会の零意気を正しく伝えるようなものを出したらよい。

資 料

湯 川 研究会の責任者には負担をかけるが、今までにもいくつか出した。要覧を小沼氏がまとめて下さった。英語版を出そうと思っている。丸森氏の言われるようなものも出来るだけ出したい。「研究会がどのような方針で、どうやられ、どういう成果をあげたか」という風なものを出せたらよい。

牧 Preprint を見なおしたい。Supplement は頁数も限られるので、今議論されているようなものは、Preprint として出したらどうか。

大 槻 研究会で個人が良い Report をされ、世話人が Preprint にまとめて出されたという例はないか。

湯 川 今のところない。

Preprint は所員が関係したものについて出してきたが、もっと拡大してもよいだろう。

所員がタッチしないものも基研で出せるだろうか。

事務長 出来るだろう。

牧 外国でも長い論文は Preprint の段階で終るものが多く、その中に有益なものもある。

山 田 研究会の報告をまとめて欲しいということは、前から言われてきたが、大変なことなので守られていない。出来るだけ Preprint まで出して欲しい。

板 橋 Preprint というと完成された論文という感じがするが、Annual Report を考えたらどうだろう。

山 田 Annual Report は所員の負担が大きすぎる。

この種のものだけで Supplement を出すのは無理だが、後につけ加えるというのはあってよい。Preprint は研究会世話人の負担が大きいのので無理は言えないが、こういう要求があったことをもう一度思いおこして欲しい。

松 田 今でも、物性研究素研に研究会報告を出している。英文のものも、Annual Report としてまとめたものでなくても興味がある人が、基研の校費を使って、研究会報告を出したらどうか。

湯 川 現在，その線でいっている。Supplement の付録として出すのがたてまえ，既にある刊行物に出す方が Circulation の上でもよい。

板 橋 成果がそう出なかったものについてもこういう研究会がもたれたという報告を出すのはよい。

山 田 来年度の Supplement についてここでは Suggest 以上は出来ないが，少し討論したい。

自分の属する Group の成果を出してもよいという人があれば一番よいが，そうでなくても意見を出して欲しい。

牧 ほんの意見を耳にはさんだものまで含め，次のようなものが今候補になっている。

- 1 Nonleptonic Hyperon Decays
- 2 s-d Exchange Interaction
- 3 Phase Change
- 4 Statistical Physics of Random System
- 5 Nuclear Matter

又，今年度小林記念号の Page 数が多くなったことから Composite Model が来年度にまわるかもしれない。

末 包 Nuclear Matter はずい分前から出ている意見なので早く出して欲しい。

豊 沢 個人のものだが，ある人が informal な国際会議の為にまとめられた Review がある Group に有効である。Original ではないから Paper としては出せないが，Preprint として出せないか。

湯 川 Exclude はしないが，適当な referee につけねばならない。

大 槻 シンポジウム報告はどうするか。中間子論の時はシンポジウム委員で出した。

湯 川 英文については，まだ考えていない。希望があれば出したい。

大 槻 出して欲しい。すべてでなくあるものを pick up してもよい。例えば，湯川先生の“基礎物理学とは”

資 料

- 湯 川 英語版を出すには国際的視野にたつよう書き直す必要がある。
- 玉 垣 記録は400頁ほどの日本文で出す。シンポジウム委員会は日本文のもので手一杯なので部員会でやってほしい。
- 山 田 それは無理。部員会はまとまって仕事をするという Group でない。部員会から編集委員へ suggest するのはよいが。
- 湯 川 要覧を英文にすることになっているが、まだ委員会は作っていない。それを拡大して部員会からも入ってもらうのはどうか。そこで15周年にふさわしいものを出したらよい。
- 山 田 それがよい。Supplement は編集委員会を悩ますから積極的意見を出して欲しい。

6. 15周年シンポジウムの最終 Session について

前日の討論のまとめの代りとして山田氏（議長）から、印象に残った点が述べられた。

問 題 提 起

湯 川 基礎物理とは自分自身を脱皮しつつ進める学問
知らない分野を意欲的に吸収すべきである。

碓 井 Scale の問題（基研を大きくしない方がよい）
体制派があってはいけない。

板 橋 効果をすぐに期待出来ない研究計画をとりあげよ
家出入のふるさとであれ（境界領域）
研究 Group を結ぶパルプであれ
年代の違いを超える斜めのパルプ

安 野 各研究 Group が大きくなって、すべての人が直接基研を利用する
という形での基研との結びつきは望めなくなった段階で各
Group と研究所の関係を維持するにはどうすればよいかという
問題提起

若 手 二人とも高い次元に立って若い層の研究体制と基研のことについて話された。

特に若手と基研の結びつきを強める為の具体案として、

1 アトム型を増やし夏の学校を援助して欲しい。

2 大学院制度を改善し、その実現までの策として Fellowship を考えたい。

3 部員会を若がえらせる。

等出され、基研を若手の拠点とせよという意見があった。

討論の中で

勝 木 共同利用研究所の共同研究にとり残された地方大学の Group もある。知らぬうちに共同利用研究所の利用者が一つの閉鎖社会を作っているような事態が発生しつつあるのではないか。

碓井・中嶋 湯川先生の個人的性質に負うところが大きい。

その個性を持ちつづけてほしい。

田中(正) 研究者の視野が狭くなり、安定ムードが出てきた。

等

〔 討 論 〕

堀(淳一) 経験から言って、基研は地方の人にとっても乗りにくいエスカレーターではないと思う。

風変りな特殊な研究は地方の人から出てくる確率が多いので、それを取りあげる努力が必要。

山 田 基研は排除する空気はないが、全然利用したことのない人は、入り込むまでは気が重いのではないか。

山 下 物性研でも、それを感じている。

田中(一) 「制度として利用できる」ようになっていれば良いと思いがちだが、それは、「利用しやすい」ということの第一歩。

牧 基研が共同便所でない真髓は全国から選出された部員会にあると堀尚一氏が言われたが、まだ、その本質的機能を発揮していないのではないか。

研究計画の種類が多すぎるという話が出たが、むしろ同じ研究の Pattern の決ったものが無制限にくりかえされるのはよくなくもっとバラエティに富んだものが、多くあってよいと思う。

富 田 研究計画をたてる時、どんな地方の人でも参加出来る余裕を含めて公募して欲しい。

参加者の人選まで世話人が責任をとる型でやるべき。

丸 森 基研発足当初は各地に城がなかった。だからこそ全国の人が基研を中心として共同していく気運があった。

最近では、素粒子論 Group も大きくなり、各地に城が出来て安定ムードがあり部員会も若い人、地方の人が少しも出てこない。研究会で金をとることばかり考え「自分達の基研」という感がうすくなった。

ポストはつまったというが、それは中央の大学のことで、地方では悪戦苦闘している人達がいる。そういう人達の要求を取り入れていくのが基研の本来の精神だ。

地方大学、若い人こそ現在では真に基研を必要としている。

湯 川 シンポジウムの討論のとき、若い人が、若手と古手がごたごたすると言われた意味がよくわからない。

世代論はどこにどういくか。

若手は自分達に自主的にやらせろというが、若手と古手がごたごたするというのはと逆説的だ。

玉 垣 いろいろ即物的問題提起があったが、それでは不十分。今迄は湯川先生の持っておられる特色が夫々の具体的提案とマッチしてきた。今後は経験を研究所の Geist となるべきものとして論理化することは部員会の仕事である。

。基研は「大いなる試みの場」となるべき。

。地方大学の意味は新しい芽が出てくるという点にある。

。若手が多数出てくるということを若手自身が認識すべき。

。境界領域は、出来上ったものどうしくつつくのではなく、ある枠をつきやぶって新しいものを生み出す点で基研とつながる。というようなことを考える。

田中(一) 地方にいて、一番ありがたいのは、地方で何か新しいことを始めた時、それを受け入れてくれる場所があることを感じる時である。

15年間に基礎物理の性格を形成してきたが、それをどう継承するか。

大 槻 伝統とは、沈んでいるようで何かの機会に出てくる。湯川先生の個性たる Atmosphere が日本全体にばらまかれ、それが沈んで伝統となるだろう。

都 築 湯川物理学は物理への1つの Approach のしかただが、物理が発展するに従って他の方法があってよい。若手が基研に対して不満をもっていることが、一つの物理学の現われではないか。

松 田 基研は他の共同利用研と違い「何をやるべし」という枠がない点が良い。

丸 森 湯川物理学というものはない。湯川 spirit というべき。人が認めようが、どうあろうが、新しいものを試みていく精神がそれ。即ち反体制の spirit だ。

研究所は出来上がったが、研究の問題にせよ地方大学、若手の問題にせよ、どこにでもこの spirit を生かすことが大切。反体制の spiritこそ素粒子論 Group の本来の精神と考える。

湯 川 湯川物理学はあるはずがない。世代親の問題がある。研究者の数はどんどん増え、あとになる程、分野が establish される。その中からどうすれば新しいものが生れるか、常識的には現在は、新しいものが出にくい、その中でも何か出ないといけない。

若い人は自主的にやらせろというが、それで、かえって世代がわかれてしまう。

基研としても何かしなければならぬが、規模を大きくすることはマイナス面の方が多いと思う。

若い人の中から、私に思いもよらないことが出てくることを期待する。

7. 研究計画 アトム型の枠について

(アトム型)

山 田 基研のあり方に対する要望が出たので、研究計画の中で、多少とも具体化していきたい。

牧 若手が夏の学校の精神的、物質的援助の要求を出した。

資 料

- 大 槻 大学院制度が充実したというが、教育制度としてであって研究制度としては弊害が多い。大学院生がアトム型で基研に来た時、研究者として扱って欲しい。
- 末 包 若手がもっと基研を利用しやすくなるよう気やすく、若い人と接することのできる研究者を流動研究員等の型で基研に置いて欲しい。
- 沢 田 地方、若手から新しいものが出た時 encourage するのにアトム型は役立っているが、そう多くの人には来れない。夏の学校は基研を利用した若手が基研のことを広める意味で有意義だ。
- 碓 井 アトム型は少いと意味がない。若手にはいつでも基研で話し相手がある程度にして欲しい、という意見が強い。
- 山 田 奨学生的なアトム型をなくすと倍の収容能力をもつ。
- 湯 川 財団の奨学生もあるので、なくしてもそう問題はないと思う。
- 藤井(竜) 研究室の体制の中では、核物理全体の観点をとることは困難なので、基研でそれをやってほしい。失業救済的なものは、そう意味がない。
- 藤井(保) 今までの奨学生的なものへの応募者数は？
- 玉 垣 昨年は財団の奨学生とあわせ5名の定員に18名応募があったが、学振とかけもちで出しているので繰上ってかなりの人はうけ入れられる。
- 山 田 アトム型研究員の数が増やした方がよい。奨学生的アトム型は財団奨学生3人に加えて1人にするか。
- 末 包 2人共切った方がよい。
- 板 橋 いろんな研究室の人が、入れかわりたちかわり来る方がよいから、Post Doctoral 奨学生的なものは、やめた方がよい。
- 山田(議長) Post Doctoral 奨学生的なものはやめることにしたい。
- 湯 川 各大学で忙がしい年配の人が切れ切れに来るとか、若い人が長期間来るというのも意味があるので、exclude しない方がよい。
- 牧 夏の学校の準備段階の Group 討論を基研でやれないか。
- 山 田 Post Doctoral 奨学生的なものは、来年度はみおくり、細かい

配分方法については公募の時に考えたい。

一般の研究計画については、今までの型にとらわれず、新しい型の計画も case by case でとりあげることにし、研究部員は各研究室で新しい研究計画ができるよう奨励して欲しい。

8. 科研費について

・前回部員会議以降の経過および学術会議の今秋総会で出された方針等につき、牧氏より説明があった。（資料参照）。

とくに注意したいことは、本年度より「科研費分科会運営規則」（'68. 4. 19 制定）によるシステムが学術審議会の側で確立され、それによると全体の配分につき運営委、各種目につき、運営小委が少なからぬ役割をもち、21に学審のメンバーが ex officio に入ってくることである。いいかえれば、科研費配分の実質を決定する土俵がすでにつくられてしまったことになる。

・今年度の審査配分に関して学術月報の最近号に資料がのっているので参照していただきたい。

・素粒子・原子核に関しては、秋の物理学会分科会の折の素粒子論グループこんだん会で、来年度も、本年度と同様の方式で申請することが諒承された。また本年度は、配分を辞退したため、向う一年間のグループの連絡体制をたもつため、カンパ（一人一口500円、目標額25～30万円）を早急に集めることが決定された。（科研費についての文責、牧二郎）

9. 宿舍の運営について

湯 川 未確定要素はあるが、今年12月頃から工事にかかる情況

地上5階，地下1階（食堂）

財団に無理をいったことだから財団の事務所を入れることになるだろう。

宿泊室はほぼ15室となるだろう。

研究所の Space が狭い点をカバーすることを考えてもよい。

田中(一) 少し研究室的なものを作り、先生がそこにいられるというのもよい。

山 田 昔3階にベッドがあり、生活をすべてそこでした時代は牧歌的で

資 料

はあるが、疲れた。多少生活の場は変わった方がよい。

末 包 核研宿舎はよい。2人部屋だがカーテンで個室のように使える。
机、椅子は欲しい。
安全性をしっかりとしてほしい。

松 田 Progress が移ることを考えたら。事務長の努力に感謝する。員
等旅費の増額についても、頑張っていて欲しい。

事務長 当初配当を削られた分でも出来るだけとってきたい。

山 下 物性研でも毎年足りず運動している。歩調をそろえて運動して欲
しい。

牧 所員もいろいろ考えるが、思いつかない面もあるので、気のつい
たことを教えて欲しい。

山 田 出来るだけ基研を back up して欲しい。

文責 研究部員会議議長団

第46回基研運営委員会議事録

昭和43年11月2日

於 コロキウム室

議 長 湯 川 秀 樹

出席者 田 中 一， 中 嶋 貞 雄， 小 川 修 三，
碓 井 恒 丸， 高 木 修 二， 小 林 稔，
松 原 武 生， 井 上 健， 牧 二 郎，
松 田 博 嗣， 玉 垣 良 三，

欠席者 坂 田 昌 一， 朝 永 振一郎， 久 保 亮 五，
小 谷 正 雄， 中 村 誠太郎（外国出張中）

議 題 1 研究部員会議の報告と承認

2 基研の将来計画

1. 研究部員会議の報告と承認

報告が行われつつ、以下のような追加意見が出されて承認された。

○ サブルメントについて

碓 井 丸森氏の言われることを完全にやると困難，現在 Supplement に出している事務的なお知らせを拡大し，年間どういう研究会をしているかのリストを出したらどうだろう。

牧 IAEA は Preprint の内容を記した表を出している。基研の Preprint のリストとどういう研究会があったかまで出したらどうだろう。

高 木 Preprint というまとまった論文のようでよくない。Report という考え方をすればよい。

湯 川 Preprint の Weight が大きくなり，雑誌の発行が遅くなるのに処するものという考えが強くなった。

牧 個人の出す Preprint と研究所として出す Preprint を少し変えた方がよい。

高 木 形式的にはそれがよいが，日本語で作る場合でも Reporter がまだしっかりまとまっていないので，Formal には出したがらなかったりして難しい点が多い。

玉 垣 研究会の目的意識を世話人がまとめて書くのなら可能。

湯 川 研究会報告について議論したのは，そう以前のことではない。又，ここで議論したことが役にたつこともあると思う。

○ 15 周年シンポジウム最終 Session の討論

湯 川 ○ Scale はあまり大きくしない方がよいという意見は強いが，若手が増加し，基研に親近観を持たなくなったという点にどう対処するか。

○ 大きい大学に堅固な城が出来た。初期のように基研で研究するという雰囲気がない。しかし地方大学では研究する場がない。そういう人には基研は大切。

パイプを通して城を閉鎖的にしないようにするのはよいが，城をくずしてしまうのはよくない。

。私はもちろん断絶的継承になると思う。断絶的というと、革新的ということになるが、ここをつぶすというのではない。

。世代論について、40才以上の層は続いていると思うが、それより若い層ではこまかい世代がありむしろ作られたものという感がある。若手が古手のごちゃごちゃする、ということを考えてくれるのはよい。

小 川 広大の大学院生が研究室では“先生”と“生徒”の感が強いがシンポジウムに出席して初めてそれではいけないと気づいた。

広島での“小川先生”と基研の“小川さん”は違う、と言っていた。基研に来ると零意気が変わるらしい。

碓 井 名古屋の学生もそう言っていた。

中 嶋 学生のとらえ方もだが、部員会では皆さん若いことを言われる。

玉 垣 研究室では学生がそう扱ってくれない。

湯 川 若手が“大学院制度は改善できない”という前提で話されたのが情なかった。“先生—生徒”の枠に入りこむのは生徒も悪い。

松 田 物理教室では民主的な運営をしているというので、その点改善されているのではないか。

牧 名古屋では確かにそうやっているが、自然発生的に上下関係が生じる。

田 中 どこまで若手というか、DCを出て何年かたった人が若手の層にへばりついている。

高 木 若手の力を利用しようとする。

田 中 利用が求められるのでなくへばりついている感がある。そこでないと大きい顔ができないので自分達で新しい層を作らない。新保守派というべき人達がいる。

中 嶋 我々の研究そのものが問題をもっている。生物物理では教授も学生もほとんど同じレベルになっている。

田 中 分野による。低エネルギー実験は中途半端な時期で充分実験できないが、スタッフはそれを直視するのを恐がっていて、若手の方がかえって強い自己批判をしている面もある。

湯川 素粒子では若手、古手は同じ立場に立っている。若手は若手で何か新しいものがでる可能性を持っている。

牧 大きな発展があると若手が develop して古手はついていけないかもしれないが、

湯川 大学院生の老人意識はよくない。学生扱いせず、研究者として金を出すべきだ。

松田 博士課程になると助手と同じ仕事をしているのに、一方は給料をもらい、一方は授業料を出しているのは不合理という意識が強い。

湯川 大学院大学の構想は保守的感が強い。

碓井 名古屋で教授以下、大学院生も集った場で大学院制度をつぶした方がよい、といっても通じない。大学院生側が、5年間の大学院生活を決ったものとしてうけとっている。大学院制度をつぶしてしまう以外に方法はないと思われる。

玉垣 大学院である程度の仕事をし、博士課程を出ればどこかにいける、という楽観ムードがある。

高木 博士課程の人は研究者意識をもっている。先生は何もしてくれないと思っている。

湯川 世話しすぎるのはよくない。

田中 シンポジウムで基礎物理学について有意義な話があったが、それを担ってきた人は若手ではないのか。

湯川 今40代、50代の人が主だろう。今の若手ではない。

高木 基研ができた頃の若手である。

田中 しかし、古手があつての若手でなく、戦争があつて断絶的に進んできた人。

牧 若手と古手という区分に反対、断絶後出てきた人は学問の新手。若手は必ずしも新手ではない。

田中 基研に関係ある研究者の数がふえている点、どう考えるか。

高木 ここに関係あるか否かは分野的に決めるべきでない。“基礎物理”という概念に沿って考えるべき。

田中 物性では物性基礎論と物性研やプラ研での研究の違いは自ずから

わかるが、素粒子ではそうっていない。“基研に来たら何となく良いことがあるだろう”という考えはよくない。

・研究計画・アトム型の枠について

〔アトム型で Post Doctoral 的なものを来年度みあわせる事について〕

碓 井 部員会の議論は来年度博士課程の修了者が多くポストは少ないということを認識した上でのものか、という声がある。

田 中 私立大学の理工系新設が今年から少なくなった。

高 木 absolute にはポストはあるが、今まで若い人をとってきた所が、古い人を欲しがり、若い人は行きづらい。

玉 垣 地方に孤立して行くのではなく、できれば2人以上で行けるようにするとか、地方に行っても基研を通じて孤立感をなくするようするのが基研の役割と思う。

湯 川 昔から地方に行きたがらない風潮があったが地方に行ってもここを利用して“やる気”を保持することができるよう地方を優先するのはよい。

碓 井 地方へ出て来にくいのではないか。

玉 垣 1ヶ月なら無理してでも来れるようだ。講義が多いというより零碎的に出にくいらしい。

田 中 教育に熱心たれ、で研究することが良いという風には通らない。

湯 川 地方では研究している人はとりたがらない。

田 中 地方大学の人アトム型で基研に来られても、基研であるテーマを研究し、帰ったら研究から遠のかれる人がある。基研の研究計画に関係をもたれた人は研究意欲が続くと思われる。

湯 川 アトム型を多くの人に利用していただきたい。予算の関係でとりあえず来年度は奨学生的なものは見送る。財団の奨学生3人は残る。

小 林 まわりに博士課程を出る人がかなりいるが、学振・財団の奨学生、アトム型に対する期待は強い。

田 中 来春 D.C. を終る人が素粒子、原子核で50人いる。

松 原 物性も来春は優秀な人が多く出る。

牧 今までアトム型の奨学生的なものは財団の奨学生とこみで募集してきた。来年度も絶対とらないというのではなく、応募者が多かったら少し考慮したい。

玉 垣 その場合、研究計画の予算を一部アトム型のように使えるということか。

松 田 地方とのコンタクト。ごちゃごちゃする意味からも失業救済的なものは定着しない方がよい。

玉 垣 切ってもよいと思う。今までの傾向として奨学生的なものは、それまで属した所で研究したいという考えが強いとか、京都の人が多い等好ましくない点があったのではないか。あまり気にしないでよいと思う。

小 川 就職する前に基研で研究するというのは良い。今年は良い例があったと思う。

田 中 部員会で決ったことだし、出てくる批判は部員会でうけるべきだと思う。

牧 奨学生的なものは来年度はみあわせるということを理由をはっきりさせて事務局報等に早く出す方がよい。

玉 垣 研究計画を推進する為にある人が基研に来て研究してもよい。この場合は研究計画が認められたということ。

湯 川 今までは個人の業績の審査をしてきたが、研究計画の審査だけにするのもよい。業績主義はよくない。

高 木 3ヶ月以上を認めるとき、研究計画の審査だけでよいか。

湯 川 長ければ審査も厳しくなり得る。1ヶ月単位のようなものをできるだけ多く、というのがよい。

〔結 論〕

多くの人がアトム型で基研を利用できるよう、1～2ヶ月の応募を歓迎するが、大学院博士課程を修了した人が1年間応募される事も認められている。但し、その場合、採用された人は基研で研究するものとし、途中で就職が決った人も、最低3ヶ月は基研に滞在して研究して欲しい。

2. 基研の将来計画

湯 川 現在方々で大学紛争がおこっている。基研は共同利用研究所として、大学全体の管理・運営にはできればタッチしない方が望ましい。評議会参加の義務は5部門以上の研究所しかないのだから今は良いが、今度基研の部門が増えても参加しないということを決めた方がよい。総長選挙もこの意味で参加しない方がよい。棄権しても、責任はまぬがれないだろうが。

小 林 原子炉は共同利用研究所でも、ここと非常に意見が違ふ。

牧 プラ研のやり方も一つのやり方と思う。formalには投票権もあり評議会のメンバーでもあるが、原則的に大学との間に相互不干渉の認識にたって棄権している。プラ研は大きい設備をもっているので不干渉ではいられないが、ここはかえってよい。

小 林 京大理学研究科では共同利用研究所の教授は研究科会議の構成員であってもなくても良い。

湯 川 これからの基研のあり方について議論して欲しい。

玉 垣 Scale の件。

。若い核の人は基研を利用しにくいらしい。私の協力者としてでなく、核の人がもう一人はいて欲しい。

。6部門は必要。任期制が守られていれば、多少大きくなっても固定化の必要はないのではないか。

。増員分はできるだけ若い人にあて、任期の短い助手とか、Post Doctoral Fellow - Ship 的アトム型とか実質的に使えるとよい。

牧 客員部門もある時期には設けた方がよい。4部門にしても、完全講座になれば助手クラスがふえる。

小 林 プラ研では助手は専任だが、助教授以上は国立大学の人を呼んでくる。

。6部門にするのはよい。

湯 川 助教授、助手を任期をつけて来てもらうのはよい。物性・核・宇宙線の Staff が少なすぎる、助手だけをふやすというのは難し

いいが。

田中 学部には機械・設備に付随した助手がくるが、ここはそれがない。
客員部門として任期のある助手のポストが奨学生的に使えるとよい。

湯川 大きい問題は政治的解決ができるが小さい問題は通りにくい。

井上 機械的にいえば、評議会に出なくて良いとか便利な点もあるし、
4部門というのはよい。

湯川 脱皮することが本命なら、開拓していくことに努力し、いらなくなったら脱ぎすてればよい。プラ研、物性研等との関係を保持すれば可能。

松田 2部門ふえた程度はよい。あまり大きな声を出さなくても討論できる範囲。

湯川 助手クラスの枠を広げて若い人が入ればよい。

湯川 流動研究員について基研は努力したが、一般的に使われるようになり、ここはかえって利用していない。

松田 大学院生をとらないことのカバーを何らかの形でしたい。物性はもう一部門欲しい。

小川 ここは、ある学門の branch で Self contained でない点が良い。他所から来る人はその為かえって contact しやすい。

中嶋 整備されると物性研的になる。

高木 部門増には反対。それより基研の望ましいイメージを作ってみたい。

中嶋 例えば素粒子が爆発的に発展するときには、基研から物性を exclude するか。

高木 ここですべてやらなくてよい。

湯川 ここがあまり弱体でない方がよいが、やはりここは self contained でない方がよい。

牧 学問的な価値判断ができればあとはやり方がある。

湯川 基研は近傍をのけて考えると弱体化する。

高木 近傍の性格に規定される。

井 上 その為にも、モレキユールのものをもっと活用できるとよい。
松 田 今後できる共同利用研はできるだけ任期制を採用していただきたい。良い条件の所で若い人が行きたがる所ほどそうであって欲しい。

碓 井 城ということもあるだろうが、学部には任期をつけるという話は通らない。“良い伝統は守る”というのが反論の根拠。

湯 川 研究所は任期をつけやすい。誰でも一度は動くべき、昔より今のほうがよく勉強するが雑用が多くて、学問の進歩が早いから成果が出にくいだけ、

超伝導ができるまでは、物性のことも理解できたが、わからなくなった。

中 嶋 超伝導は物性の人にも長くわからなかった。初期は B. C. S. 理論等本当の意味はわからなくて、出てきた結果が良いので認められるようになった。

湯 川 それ以前のことは、そんなに勉強しなくてもわかった。素粒子がわからないのは別、誰にもわからないものはわからない。若い人がわかっていればよいが、若い人は自分で考える習慣がない。

中 嶋 今はよくわかって発表するのでは間にあわないという意識がある。

牧 長期、短期 etc. は形式論的区別。もっと別の次元で考えたい。

田 中 秋の部員会で研究会が計画される背景がわかる話をして欲しい。

湯 川 ある研究会について、長期的研究の流れのような話をしてもらうのはよい。

松 田 基研を利用したことのない人にもわかる言葉で募集したい。

以 上

(文責 片 岡 韶 子)